

名前(国内所属校)：祝迫直子（広島県立高宮高等学校）

現地勤務先：スラウェシ島 ジェネポント県 教育局 学校外教育課

H21年1月17日～H21年4月18日の出来事，活動の様子

Selamat(スラマツト)

インドネシア語で、「安寧な，安全な，平和な」という意味です。
いろんな言葉と組み合わせてつかいます。

H21年4月18日作成 第4号

広島県立高宮高等学校 地理歴史・公民科教諭 祝迫直子

青年海外協力隊（JOCV）

H20年度 第1次隊

任国 インドネシア

職種 青少年活動

広島県の皆さん，^{スラマツト シア}Selamat siang!（インドネシア語で「こんにちは」の意味です）

私は広島県立高宮高等学校の祝迫直子です。平成20年度より現職教員特別参加制度で青年海外協力隊へ参加しています。昨年の6月23日にインドネシアへ渡航して，任地ジェネポント県教育局へ8月5日に赴任しました。任地での生活も8ヶ月が過ぎました。第4号である今回は，職場での服装とジェネポント県教育局学校外教育課の仕事についてお話しします。

1 職場での服装

8月に赴任してまず職員の方にアドバイスを受けたことは「制服を作る」ことでした。

青年海外協力隊として赴任している私の場合，教育局に所属していても，国家公務員ではないので，本来であれば作らなくても構わないようです。しかし，制服を作ることで，インドネシアに同化しようとしていると好意的に見られることや，公務員服を着ることにより，外国人としての印象を与えず，乗り物などでの安全性が高まるというメリットがあります。

制服を初めて作ったときは日本円で換算すると6,000円位かかりとても高価に思えました（公務員の平均月給は2万円位）。しかし，任国での生活にも最近ようやく慣れてきて，安い布を探して買い，親しい仕立て屋さん頼めば，正規の値段であっても，2,000円位でできることがわかりました。それに個人の好みもいろいろ聞いてくださるので，一見皆同じ制服に見えても一人ひとりの型は異なるのです。これは制服だけの話にとどまらず，仕事にも同じことが言えます。親しい人や相談できる人がいるかどうかで，結果への過程の道筋が変わってくることを実感することの多い毎日です。



写真は，左から緑の制服が月曜日の県職員全体の朝礼用（日本へ30年前に行ったことのあるインドネシア人の方とともに）。黄色の制服が火・水・木曜用（先輩の栄養士隊員とともに）。茶色の制服はジャカルタモデルということで，黄色の制服の代わりに着ます（JICAの教育専門家の方とともに）。一番右は毎月17日のみ着る服装で，独立記念日の8月17日を毎月記念して県職員全体の朝礼をしています（教育局の列にて）。金曜日は体育の日で，自由な服装（私服）です。

2 学校外教育課の仕事

私が所属しているのは、教育局の中の学校外教育課というところです。学校教育とは異なり、すべての活動場所が間借りの場所で、まだプログラムの内容は流動的です。ノンフォーマル教育とも呼ばれています。主に3つの部署から成り立っていて、**中途退学者の再教育（卒業資格取得）施設の設立と運営**、**識字教室の設立と運営**、**幼児教育施設の設立と運営**となっています。インドネシア政府と外国からの寄付金で運営されています。

中途退学者の再教育（卒業資格取得）施設の設立と運営

インドネシアは地域間の格差が大きく、都市と比べて地方の村々では、学校を途中でやめる人だけでなく、中には全く学校に行ったことがない人が多くいます。

学校へ行かない理由は経済的理由がほとんどで、皆生きるためのお金を得るためにおとなの仕事の手伝いをしたり、農業や海草作りに参加したり、ベチャ（自転車の前に荷台を取り付けた乗り物）の運転手をしています。しかし最低限日々村で生きるための知恵やイスラム教徒として知っておかなければならないことは、学校へ行かなくとも村々の生活の中で年輩の人から既に教えてもらっています。

しかし、町に出て仕事を探すとすると、やはり学校を卒業しているの方が優位により仕事に就くことができるので、正式な学校教育は受けていないけど、それに準ずる勉強をすれば、学校卒業と同じ資格をとることができるプログラムができました。

中途退学者の再教育プログラムはパケットA B Cと呼ばれ、パケットAは小学校卒業と同じ資格を取得でき、パケットBは中学校、パケットCは高等学校卒業資格を取得できるようになっています。

教える場所は放課後の小学校の教室であったり、先生の自宅であったりします。授業料は無料で、教材等は筆記用具やノート、教科書も無償で配布されます。年齢層は10代から50代（年齢制限あり）の人たちが登録しています（定員1教室、20名）。週3日、午後3時から5時まで。1日2教科程度。

先生は午前中は学校の先生をして、午後はパケットを担当する人が多いです。卒業資格を得るためには、3年間勉強した後、毎年10月に行われる国家試験に合格しなければなりません。

識字教室の設立と運営

村々では、経済的理由により昔学校へ行けなかった人が多いため、インドネシア語を知らない人たちもたくさんいるのです。特に女性が多く、教室の大半はお母さんたちが占めています。

インドネシア語の普及は戦後になってからなので、地方言語がまだ主流の地域もインドネシア各地で存在します。ジェネポント県はマカッサル語を話す人が多く、村へ入るとインドネシア語が通じない場合が多々あります。

教室の定員は10名で、インドネシア語のアルファベットの文字から教えて、新しい言葉を習得していきます。また読み・書き・計算がある程度できるようになったら、ライフスキルを身に付ける時間も設けられていますが、今は専らお菓子作りです。ただあまりにも学ばなければならない人が多いため、半年すると学習参加者は識字教室を終了しなければなりません。

幼児教育施設の設立と運営

本来ならば幼稚園を設立できればいいのですが、あまりにも不足すぎているので、建物的な施設は作らず、先生の家の一部を教室にするなどして、幼い子どもたちが幼稚園と同じ教育を受けることができるようになっていきます。幼児教育が普及していないことが、就学率の低さにつながっていると政府が判断して、プロジェクトが始まりました。2007年からの開始で、施設を増やしつつ、今は先生方の参加体験型の研修もたくさん行われています。

私は現在、に関わっています。プログラムは始まっていますが、その内実は課題がたくさんあります。また、少しずつ私自身の取り組みについてもお話できればと思っています。



パケットBの学習参加者と



識字教室のお母さん方と